

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 20 日現在

機関番号：12601

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2015

課題番号：26770026

研究課題名(和文) イタリア宗教史学派の宗教理解に関する体系的研究

研究課題名(英文) Systematic research on "religion" of the Italian school of History of religions

研究代表者

江川 純一 (EGAWA, JUNICHI)

東京大学・人文社会系研究科・研究員

研究者番号：40636693

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究によって、20世紀イタリアで展開した科学的宗教研究(イタリア宗教史学)が、創始者であるラッファエーレ・ペッタッツォーニ以後、エルネスト・デ・マルティーノ、アンジェロ・ブレリチ、ウーゴ・ビアンキ、ダリオ・サットゥッチ、ヴィットリオ・ランテルナーリに受け継がれたことを明らかにした。また、彼らには「宗教」、「呪術」、「儀礼」、「神話」の各概念を、歴史主義的手法と比較方法を用いて、総合的に研究するという点で共通点が見られることを明確にすることができた。

研究成果の概要(英文)：The aim of this research project was to explore how the Italian school of History of religions was formed, and how the methodology of its founder, Raffaele Pettazzoni, was succeeded to his disciples (Ernesto de Martino, Angelo Brelich, Ugo Bianchi, Dario Sabbatucci, and Vittorio Lanternari). I demonstrated that they share the common feature. They use the concepts of "religions(religioni)", "magic(magia)", "rite(rito)", "myth(mito)", and investigate synthetically, adopting an approach of historicism with comparative method.

研究分野：宗教学

キーワード：イタリア宗教史学 宗教学 ペッタッツォーニ ファシズム 呪術

1. 研究開始当初の背景

一般に、比較宗教を基礎にした近代的な宗教学研究(宗教学宗教史学)は、1870年代以降、主としてプロテスタントが優勢な地域で発生・展開したとされている。イギリス、オランダ、北欧などがその例として挙げられ、多様な宗教環境がその背景にあると説明されている。だが、この一般論からは重要な点が抜け落ちている。それは多様な宗教環境においてだけでなく、強力な一者が存在する地域でも、その一者への対抗として宗教学宗教史学が発生・展開するという、イタリアのケースである。イタリアは世俗的な学としての宗教学宗教史学が、制度的にも研究者の内面的にも明確な形で成立し受け継がれてきた、例外的な場である。

1970年代以降、宗教概念の再考とともに、徐々に宗教学宗教史学という営為そのものにも反省的な目が向けられるようになった(宗教概念批判)。これは人類学のエスノグラフィ批判と植民地主義批判を受けたものと捉えることが可能であり、この宗教概念批判は現在も続いているとみることができるが、ここでもまたイタリアにたいする十分な検討が欠けている。イタリアの研究者によるイタリア語の著作が、他との比較の俎上に挙げられていないという状況が存在する。

2. 研究の目的

本研究では、イタリア宗教史学の創始者、ラッファエーレ・ペッタッツォーニの宗教史学と、その弟子達(エルネスト・デ・マルティーノ、アンジェロ・ブレリチ、ウーゴ・ピアンキ、ダリオ・サッパトゥッチ、ヴィットリオ・ランテルナリー)の研究を比較することにより、イタリア宗教史学についての体系的な検討を行う。学問の継承はいかにして行われたのか、何が受け継がれ、何が切り捨てられたのか、そこにイタリア特有の事情が存在するのかどうかを明らかにする。

なかでもブレリチとデ・マルティーノが特に重要である。両者が力を注いだのは儀礼研究と神話研究であるため、1960年代イタリアの儀礼論、神話論をまとめる作業が、まずは必要である。デ・マルティーノは、現在、イタリアで最も研究されている宗教学者であるが、その近年の成果は我が国にもたらされていない。デ・マルティーノは、彼からの影響を明言している歴史学者カルロ・ギンズブルグとの接続という観点からも重要である。民衆への視点、80年代以降のギンズブルグに見られる比較への志向は、ペッタッツォーニに由来するものである。また近年エリアーデの宗教理解へのデ・マルティーノの影響が指摘されている(Wedemeyer, Doniger (ed), *Hermeneutics, Politics, and the History of Religions: The Contested Legacies of Joachim Wach and Mircea Eliade*, Oxford, 2010)。

また、未刊行の資料を集めることも本研究

の目的である。ブレリチはハンガリー出身であり、ペッタッツォーニのもとで学ぶ前はカール・ケレーニイに師事していた。ブレリチとケレーニイの往復書簡集はすでに刊行されている(Károly Kerényi, -Angelo Brelich (a cura di Andrea Alessandri), *Tra gli Asfolodi dell'Eliso*, Roma: Editori Riuniti universit Press, 2011)が、イタリアのアーカイブにはブレリチとペッタッツォーニ、ブレリチとデ・マルティーノ、ペッタッツォーニとデ・マルティーノ、それぞれ往復書簡が保管されている。これらの書簡に加え、講義ノートや日記をも収集し、三者の関係について検討する。

ともにペッタッツォーニの歴史主義的宗教理解を受け入れた、ブレリチとデ・マルティーノの儀礼論、神話論の分析により、ペッタッツォーニ以後のイタリア宗教史学を明らかにすることは、宗教学宗教史学自体の再考にも繋がるはずである。

3. 研究の方法

サン・ジョヴァンニ・イン・ペルシチエートの歴史文書館にて、ペッタッツォーニ、ブレリチ、デ・マルティーノの未刊行の書簡・日記・講義ノートを収集する。ペッタッツォーニの故郷であるサン・ジョヴァンニ・イン・ペルシチエートには、彼の全著作、手稿、書簡、講義ノート、ペッタッツォーニの関係者に関する資料が収められている。また、刊行・未刊行を問わずデ・マルティーノとブレリチに関する文献のほとんども入手可能である。

アンジェロ・ブレリチとエルネスト・デ・マルティーノのテキストの精読を行い、それぞれの儀礼論、神話論を明らかにしながら、ペッタッツォーニ以後のイタリア宗教史学について検討する。ブレリチの場合は南太平洋と古代ローマの神話・儀礼研究、デ・マルティーノの場合は南イタリアの祭祀研究(タランティズム)と民間の語りがその研究対象である。

デ・マルティーノが現地調査の対象とした南イタリア(特に、バーリ、レッツェ、ガラティーナ)というコンテクストを検討する。デ・マルティーノが現地調査を行った場所への訪問を研究計画に入れているのには理由がある。デ・マルティーノが目指したのは南イタリアの経済的政治的上昇と、南イタリアへの差別的な視点の撤廃であった。民族学・民俗学と彼の政治運動はこうしてクロスする。宗教理論・儀礼論・神話論と実際の祭祀との接続を確認することは、現地の人々がデ・マルティーノの仕事をもどのように受容したのかという問題系もコンテクスト分析には欠かせない。

4. 研究成果

2014年度は、まず「呪術」という問題系をめぐる論考を発表した(雑誌論文)。論旨

は、フレイザーのいうところの呪術的思考を、積極の意味において捉え直したものが、レヴィ=ストロースの「野生の思考」であるというものである。

そして、ペッタッツォーニに関する資料と、宗教史学の隣接分野（民族学・民俗学・歴史学・考古学）の文献の読解を行い、靈魂論と最高存在論という宗教学の二つの流れが、折口信夫の宗教論のなかに流れ込んでいることを明らかにした論文を発表した（雑誌論文）。また、ペッタッツォーニの最高存在論の基礎となった、アンドルー・ラングについて（学会発表）、ペッタッツォーニ宗教学を受容した折口信夫の宗教論について（学会発表）学会発表を行った。

さらに、2015年1月には、『イタリア宗教学の誕生 ペッタッツォーニの宗教思想とその歴史的背景』勁草書房を刊行し（図書）宗教研究におけるイタリア宗教学の重要性を説いた。同書の内容を以下に記す。

本書は、20世紀イタリアで独自に展開した、宗教の歴史的研究（「イタリア宗教学」）の創始者、ラッファエーレ・ペッタッツォーニの宗教思想とその歴史的背景を明らかにした書である。ペッタッツォーニは、彼は学の世俗性を強く主張し、進化主義的な宗教理解と、カトリックと結びついた原始一神教説とを同時に批判しながら、固定的なモデルにとられない宗教史叙述の礎を据えた。キリスト教を特権化しないような宗教研究を構想したのである。このイタリア宗教学は、イタリア国内だけでなく、国外でもエリアーデのような同調者を生み出すことになる。

全体は四部に分かれている。第一部「道程」ではペッタッツォーニの全体像の提示を行った上で、考古学から宗教史学へと転換した彼の初期の活動を検討した。彼が日本宗教の研究から宗教史学を開始したことは特筆すべきことである。

第二部「宗教史学講座の設置とファシズム」では、ペッタッツォーニの思想と、彼が活動した時代との関わりを考察した。一九二三年、ファシスト政権はペッタッツォーニに国内初の宗教史学講座を与え、宗教史学はアカデミズムという制度のなかに居場所を得ることになる。この時期には、イタリアを至上のものとするイタリア至上主義が存在したが、ペッタッツォーニの宗教史学もそれと無縁ではなかったことを示した。

第三部「最高存在研究 ペッタッツォーニ宗教学の基幹」は、ペッタッツォーニが最も集中して取り組んだ、最高存在研究の検討である。ペッタッツォーニは、自然の擬人化であるとする最高存在を、天の父、地の母、動物の主という三つの類型に分類し、人間が超越的なものをどのように表象するかについて考察した。この問題系は、創造神は忘却されるという、閑な神（Deus Otiosus）論に繋がる。

第四部「宗教史学と宗教運動」で扱われるのは、戦後のペッタッツォーニである。ファシスト政権崩壊以後、ペッタッツォーニは宗教的なマイノリティにたいする差別を無くすための運動を開始した。自分と同じようなカトリックの棄教者の地位向上のための運動と、彼の宗教史学が密接に結びついていたことを明らかにした。さらに、彼の宗教史学がデ・マルティーノによって継承されたことを分析した。

あらゆる現象は歴史的生成物であるとする、イタリア宗教学のテーゼを用いて、イタリア宗教学自体を分析したところに本書の特色がある。

最後に、サン・ジョヴァンニ・イン・ペルシチエートの歴史文書館にて、ペッタッツォーニ、デ・マルティーノ、プレリチに関する資料調査を行い、講義ノートや書簡などの一次資料を入手した。

2015年度は、前年に収集した資料を分析することで、ペッタッツォーニ、エリアーデ、デ・マルティーノの関係について発表を行った（学会発表）。特に、Deus otiosus の事例を紹介しながら、初めの時の回復としての儀礼という儀礼 神話理解がデ・マルティーノとエリアーデの宗教論の柱となっていることを示した。

さらに、「呪術」に関する研究を江川純一・久保田浩編、『「呪術」の呪縛【上】』、リトンとして発表した（雑誌論文、図書）。要旨を以下に示す。

1960年代以降に展開してきた religion（宗教）概念批判により、religion 概念の自明性が揺らぎはじめ、近代西欧で生まれた religion という言葉で古今東西の類似の現象を一括りにしてきたことが反省的に思考されるようになった。この流れを受けて本書では、religion の対立概念として、劣位概念として、類似概念として使用されてきた magic 概念の再検討を行った。

magic は、「呪術」「呪法」「魔術」「魔法」「奇術」「まじない」「のろい」といった具合に様々に訳されてきたが、magic という用語の輸入以前にもこれらの語は存在しており、また「まじなひ」「呪法」「飯綱」といった語も歴史的に使用されてきた。また、magic は、学問的概念としての使用にとどまらず、文学、サブカル、実践の場といった様々な領域においても、自称としてまた他称として歴史的に用いられ、そして現在でも使用されている。本書は、こうした状況そのものを研究対象にし、事例に則して概念生成の場、概念使用の場に立ち返り、magic の諸相に光をあてようとするものである。

序論にあたる「「呪術」概念再考に向けて 文化史・宗教史叙述のための一試論」第一章では、幕末から明治初期にかけての『和英語林集成』の分析から、magic の訳語として

「魔法」が突出していること。magicの場合、訳語が新たに作られたわけではなく、従来存在していた言葉から選ばれたことを明らかにしている。第二章では、magicが、19世紀後半以降徐々に、宗教学、社会学、民族学、人類学といった各ディシプリンのなかで中心概念となっていくさまを描出している。自らをscienceと規定する西洋のアカデミズムが、そのなかに包摂できない「他者」をmagicと呼ぶ傾向を指摘できる。第三章は第二章に対応する形で日本語の訳語の問題を扱う。民族学・人類学では「呪術」、歴史学では「魔術」という状況をまずは指摘できるが、分析概念としての「呪術」、実体概念としての「魔術」という区分も見いだせる。第四章は、西洋文化史・宗教史におけるmagic概念を対象にしている。イーミックな次元で歴史に登場してくるmagicは、主流派の知識体系を超えるscienceとして自己を表象する際に用いられていることを事例から導き出した。

2015年9月には、本研究課題の成果として、ペッタッツォーニの最高存在論を紹介しながら、その起源としてのヴィーコ、その展開としての折口信夫という読解の可能性を提示する学会発表を行った(学会発表)

加えて、デ・マルティーノに関する現地調査を南イタリアのパーリ、レッチェ、ガラティーナで実施し、一次資料を得た。

本研究によって、デ・マルティーノは、宗教/呪術の差異を無化する方向で研究を進め、「呪術」が抱え持つ負の表象を消そうとしたこと、ブレリチは古代ギリシアの葬送、同じく古代ギリシアの英雄神話、南太平洋の神話といった、ペッタッツォーニが手をつけなかった領域に研究を拡大したことを示すことができた。また、ペッタッツォーニ宗教史学の継承者であるデ・マルティーノとブレリチは、歴史主義的と比較方法を組み合わせた手法を師から受け継ぎ、「宗教」、「呪術」、「儀礼」、「神話」を研究したことを明らかにすることができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 3件)

江川純一、久保田浩「『呪術』概念再考に向けて—文化史・宗教史叙述のための一試論—」、江川純一・久保田浩編『「呪術」の呪縛(上)』、査読なし、リトン、2015年、7-44頁。

江川純一、「折口信夫における宗教学的思考—ライフ・インデクス論と最高存在論—」、『現代思想 2014年5月臨時増刊号、総特集 折口信夫』、査読なし、青土社、2014年、282-293頁。

江川純一、「呪術的思考の環流—フレイザ

ー・モース・レヴィ=ストロース』、『Art Anthropology』09号、査読なし、多摩美術大学芸術人類学研究所、2014年、35-37頁。

〔学会発表〕(計 4件)

江川純一、「ペッタッツォーニの最高存在論—日本宗教研究を中心に—」(パネル発表「西と東における神—靈魂論と最高存在論」研究代表者：安藤礼二、共同研究者：斎藤英喜、木村武史)、日本宗教学会、2015年9月6日、創価大学(東京都八王子市)。

江川純一、「20世紀宗教学の《トライアングル》—ペッタッツォーニ、デ・マルティーノ、エリアーデ—」、公開研究会「西と東における神—シャマニズム論再考—」(共同研究者：安藤礼二)、2015年6月27日、多摩美術大学(東京都八王子市)。

江川純一、「折口信夫という結節—宗教学的思考とは何か?—」(セッション「日本文学」の再定義)(研究代表者：安藤礼二、共同研究者：斎藤英喜、中西恭子)、世界文学・語圏横断ネットワーク第一回研究会、2014年9月23日、立命館大学(京都府京都市)。

江川純一、「アンドルー・ラングの宗教論」パネル発表「宗教学誕生期の再検討—ミユラーからデュルケームまで—」(研究代表者：江川純一、共同研究者：久保田浩、堀雅彦、山崎亮、コメンテーター：松村一男)、日本宗教学会、2014年9月14日、同志社大学(京都府京都市)。

〔図書〕(計 2件)

江川純一・久保田浩編、リトン、『「呪術」の呪縛【上】』、2015年、470頁。

江川純一、勁草書房、『イタリア宗教史学の誕生—ペッタッツォーニの宗教思想とその歴史的背景—』、2015年、311頁。

6. 研究組織

(1)研究代表者

江川 純一 (EGAWA Junichi)

研究者番号：40636693

東京大学・大学院人文社会系研究科・研究員